

☆年間第20主日(8月20日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (イザヤの預言 56章 1, 6-7 節)

主はこう言われる。

正義を守り、恵みの業を行え。

わたしの救いが実現し

わたしの恵みの業が現れるのは間近い。

また、主のもとに集って来た異邦人が

主に仕え、主の名を愛し、その僕となり

安息日を守り、それを汚すことなく

わたしの契約を固く守るなら

わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き

わたしの祈りの家の喜びの祝いに連なることを許す。

彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら

わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。

わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 11章 13~15, 29~32 節)

皆さん、あなたがた異邦人に言います。わたしは異邦人のための使徒であるので、自分の務めを光栄に思います。何とかして自分の同胞にねたみを起こさせ、その幾人かでも救いたいのです。もし彼らの捨てられることが、世界の和解となるならば、彼らが受け入れられることは、死者の中からの命でなくて何でしょう。

神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。それと同じように、彼らも、今はあなたがたが受けた憐れみによって不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今憐れみを受けるためなのです。神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。

福音朗読 (マタイによる福音書 15章 21-28節)

そのとき、イエスは、ティルスとシドンの地方に行かれた。すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」とお答えになった。しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とお答えになると、女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

まだまだ暑い日が続きますね。夏がこんなに暑いと冬はどうなるのでしょうか。もしかしたらとても寒い冬になるかもしれませんね。人間が自然に逆らい手を加えて悪化させた結果、手に負えなくなったのではないのでしょうか。まあ暑い夏は暑いなりに過ごし方を考えて対処することが肝心ですね。ここで一つお知らせがあります。フランシスコ教皇様は8月15日聖母被昇天祭の日に、四国の高松教区と大阪の大坂司教区を合併させると発表なさいました。正式な司教区の名前はまだですが、小さな司教区に分かれている日本の国ですから、少し集約することなのかもしれません。この教区のために祈りましょう。今日の日曜日の神様のメッセージはいったいどのようなものでしょうか。ミサの朗読を聞きながら、耳を澄ませて考えてみましょう。

第一朗読 (イザヤの預言 56章 1. 6-7 節)

「主の救いの実現が間近い」とイザヤは言っています。その主の救いの実現とは、イスラエルの民の救いだけではなく、異邦人を含むすべての民の救いであると言っています。そしてかれらを「聖なる私の山に導き」、「私の祈りの家の喜びに連なることを許す」とも言っています。主なる神の望みは単にイスラエルの民だけではなくすべての民族の救いなのです。そしてその救いは神との契約を堅く守ることなのです。当時では律法を守ることでした。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 11章 13~15, 29~32 節)

異邦人の使徒パウロらしい手紙の言葉です。異邦人の使徒と自ら言いながらも、生粋のユダヤ人としてのパウロは不従順のユダヤ人がもとのように神に愛される民族になってほしいと願っている様子が見られます。その中で「神の賜物と招きとは取り消されないもの」と語っています。その意味は何でしょうか。神は一途な方なのです。神は人間の弱さの事実をご存じなのです。「放蕩息子の父」のように、私たちの帰りをずっと辛抱強く待っておられるのです。

福音朗読 (マタイによる福音書 15章 21-28 節)

イエスが少し遠出をされた時のことです。すなわち、異邦人の地方に行かれた時のエピソードです。カナンの女性がイエスに助けを求めています。娘さんが悪霊にひどく苦しめられていたのです。それに対しイエスはちょっとそっけなく答えられます。「私はイスラエルの家の救いのために遣わされているから・・・」と。それでもカナンの女性は「食い下がります」。「子犬も主人の食卓から落ちるパンくずはたべます」と。カナンの女性の粘り勝ちですね。聖書にはいろいろの動物が登場しますが、今日登場の子犬はさぞ喜んだでしょうね。娘さんも病気も治って子犬も娘さんと遊べるようになって、万々歳ですね。神は人間の回心に対し諦めない方であり、帰ってくることを今か今かと待ち望む方であるように、私たちの神の恵みを求めてある意味しつこく、食い下がることを望ん

でおられるようです。それにしても一本取られたイエスは悔しかった(？)どこ
ろかとてもうれしかったのではないのでしょうか。



夏の里山(野尻湖・菅川村)2023年7月

P.S.

先週お知らせしました「日々の祈り」について、掲示しましたのでお読み
ください。おたずねは主任司祭までどうぞ。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光